

僕の姉さんが死んだのは、二〇〇六年の夏のことだった。

遺体は発見されなかった。だから何だ。普通に考えれば、姉さんは溺れて死んだ。もう二度と帰ってこない。そう思うのが当然だ。区切りをつけることには必要性がある。すぐには無理でも、いつまで姉さんが生きていると信じて傷つき続けるか、いつから姉さんは本当に死んだのだと諦めてある意味楽になるか。その期間を、法律というそれなりに確かな規則に従うのが、そこにそれを決めた責任を負うことに抱く罪悪感を幾分か軽減するからという理由が含まれていたのだとしても、非難することができらるだろうか。まだ七年しか経っていない、なんて。家族ですら、もう七年も経ったと思っっているのに。

七年連続で内閣総理大臣は交代し、ローマ法王すら代替わりし、僕は高校生から大学生になった。そうして講義にサークルにバイトにと日々を追われるうちに三ヶ月なんてあつという間に過ぎた。民法第三十条第一項。失踪宣告。前から家族間で話し合っていたとおりに、代表で利害関係人を立てて請求した。誰がそれを責められる。弟の僕ですら、それをしようがないことだと受け入れた。二〇一三年の夏の今、名実の名だけはれっきとした死人になった姉さん。ある意味生きても死んでもいいないどっちつかずの状態ではなくなつて、彼女の『死』が決定された。どちらでも『ない』ものでは『なくなつた』。姉さんはもう、『どちらでもない』『それ以外』では『ない』。

第四学群が姉さんの解釈通りの存在であるのならば、彼女は自ら選び取った定義によって弾き出された。

いわく、失踪宣告を受けて死人になつた学生は在籍できず、除籍になる。

「もう七年経つたんだ」

それだけで姉さんは理解した。

「待っててくれなかつたのね」

三輪には行つてきまふと言つたくせに、僕の目の前で帰れないと嘆いたその口で、彼女はそんなことを言う。

「姉さん、第四学群は……」

「第四学群とは何か？ 地下組織、精神世界、都市伝説、非常時における特殊部隊、同人ゲームサークル、学生たちの精神遊戯、Twitterのネタアカウント、かつて実際に構想されていた幻の学群、何の意味も為していない場

所、無限の拡張、膨張、全てであり全てでない、そして私が七年間いたところ」

姉さんは立ち上がつてこちらに向き直り、すぐに台詞を継いでくる。僕はなぜか、姉さんが、焦っているような、怯えているような気がした。

「そうじゃないよ」

「なら何を聞くつもりだったの」

「僕は聞きたいことは、第四学群は存在するか、存在しないか。あるかないか。一つと一つ。僕にとって重要なのは、決定したいのは、この二つ。答えてくれる、姉さん？」

昔のように正しく導いてくれますか。

もう姉さんにはそれができないと知っていて、僕は問う。

「先にそっちがどう思つてるか言いなさい」

姉さんは、やっぱり答えてくれない。僕は落胆と共に思考を巡らせた。どう答えるか。物差しを用意して決めればいい。

『それ』と『それ以外』ではなく、『それである』か『それでない』か。あくまで基準に沿っているのかいなかの、どちらも等しい意味の重さを持つ二択。

スーパーで売られている魚肉ソーセージの原料は松美池の鯉かどうか。答え、松美池の鯉ではない。姉さんが食べた魚肉ソーセージの原料は松美池の鯉かどうか。

答え、松美池の鯉である。魚肉ソーセージは大学図書館でレフアレンスを受け付けているか。答え、大学図書館でレフアレンスを受け付けていない。

姉さんは言った。『スタデイ、セックス』と『スーサイド』。『A』と『A以外』。無限の広がりを持つ『A以外』が、第四学群だと。

僕なりのやり方で定義してみよう。

『A以外』である『第四学群』は松美池の鯉かどうか。

答え、松美池の鯉ではない。第四学群は図書館情報学か。答え、図書館情報学ではない。第四学群は文芸部か。答え、文芸部ではない。第四学群は女装するか。答え、女装しない。『A以外』が無限ならその『A以外』にあて

はめる『Bである』か『Bでない』かの物差しもまた無限に存在する。無限に広がる『A以外』はまた同時に、

『Bである』か『Bでない』によって無限に狭められる。『A以外』が幾つの意味を持つかが、『A以外』は『Bである』か『Bでない』という物差しではかられた時点で『Bである』か『Bでない』の二つにしかならない。単純なこ

と。迷うことなく分かること。第四学群は現実に存在するか。存在しないか。それが僕が第四学群とは何かを定める際に使う定義の仕方。僕の答え。姉さんはじっと待っている。僕は意識的に姉さんのスカートの裾を視界から追い出そうと松美池に目を向ける。できることならば飲み下して胃液で溶かして消してしまいたい言葉を、それでも言わなくてはならないという義務と共に絞り出す。

「第四学群は、存在しない。そういうものだ」

「じゃあ私は、今までどこにいたの？」

「第四学群だよ」

それはどこでもないところ。竜宮城、桃源郷、昆崙山。

「僕の姉さんは第四学群にいた」

「そう。第四学群に私はいた」

「けれど第四学群は存在しない」

繰り返すと、姉さんは僕の瞳を見つめて問いかける。

「除籍になったとはいえ、存在しない第四学群に在籍していた私は？」

だからここで一つの問いが浮かび上がる。七年前に消えた姉さんは、二〇一三年の今、僕の目の前に存在するか。

「姉さん」

声が震える。

「姉さんは」

上擦った声で、きつと聞き手からすれば情けないだろうと思う。それでも言わなければ。強くならなければ。

だって姉さんは松美池に飛び込んだ。

「姉さんは、存在しない。七年前に溺れ死んだから」

遺体が見つからなかったのは、彼女の肉を鯉が全部食べってしまったからだった。

学生たちはまことしやかに彼女は松美池に飛び込んで第四学群へ行ったのだと噂する。けれど遺体が発見されなかったのは、遺体が存在しないからではなかった。他の溺死体の成れの果ての白骨たちと混じり合って分別が不可能になってしまったからだ。図書館で探せばいくらでも資料は見つかった。この大学の自殺者の量は普通じゃない。あれだけの証拠があれば、僕にだって簡単に真相の予想はついた。今まで姉さんを失踪者として扱ってきたのは、両親が姉さんの死を認められなかったからだ。三日探して見つからないなら、本当は誰にも目撃されずに池から上がってどこかで生きているのではな

いか。けれど僕は、あの池に身を投げた学生の人数を、岸辺でウィナーを差し出したときの食欲な鯉たちの獐猛なまでの喰い付きを、両親が四日目の調査の申し出を自分たちから断つたことを知っている。恋に破れた単位を落とした、そんな理由で飛び込んだ学生たちを、松美池はその大きな口で飲み込み続けてきたのだ。あの池の底には本当に死体が眠っているのだと、どうして誰も噂しないのか、僕は不思議だった。姉さんは僕に、どうして目の前に私がいることを信じてくれないの、と泣きそうな目で訴える。僕だって信じたかった。けれどできなかった。だってこんな都合のいい夢、夢に決まってる。夢でないなら嘘なんだ。嘘でないなら。本当ならどんなにか。

「つまり私は」

姉さんは池へ向き直る。水面は暗く、濁っていて、水底に竜宮城の影も形も見えやしない。鯉は泳いでいる。

「存在しないのね。弟にとって私は幽霊」

そうなんだよ、姉さん。もはや流れ落ちるのを止められない涙に視界を滲ませて肯定する。

「他者による観測において生死不明の私は、存在するかもしれないのだから第四学群に属していた。けれど、もう駄目なのね。だって私は、死んだんだもの」

姉さんは自分に言い聞かせるように呟いて、ふらふらと岸辺に近寄った。そして僕の目の前で松美池に身を投げた。

「あ」

彼女を引き上げるために伸ばした手が届くよりも早く、姉さんの身体は水の中に沈んで見えなくなる。

「姉さん」

返事は返ってこなかった。

もう二度と帰らない。

こうなることは薄々分かっていた。姉さんに呼び込まれた世界は姉さんだった。けれどここは、姉さんがいた世界ではなく僕が生きているこの現実の世界は、僕が否定する限り僕に第四学群の存在を認めない。だから公式に組織されていない第四学群は存在せず、死人の姉さんも存在しない。だからこうなるしかなかった。僕が姉さんの前にいる限り、姉さんは僕の前にいられない。死者は生者と話せない。僕の言うことが本当であるか、本当でないかという二者択一に答えることなく彼女は本当に遠いところへ去ってしまった。僕が姉さんの答えを答えずとして認めていれば、僕の目の前から姉さんはいなく

ならなかったかもしれないのに。

「姉さん」

僕は目眩に襲われてその場にしゃがみ込む。本当のこととは知らされない赤の他人だったなら。死者の甦りに飛びついただろうか。飛びついたかもしれない、と思う。けれど僕はどうしても、第四学群の存在も、姉さんが生きていることも信じることができなかった。自殺したなんて信じられなかったけど、他ならぬ本人が飛び込みたかったから飛び込んだのだと動機を言ってくれたおかげで、もう何かを疑う根拠がなくなった。だから消えた。僕が認識する現実に従って姉さんと第四学群は存在をなくした。でも、と僕は思う。それは僕にとってそうであるというだけで、他の誰かから見てもそうであるとは限らない。個人の認識がどうであろうと存在する現実を、けれど認識次第でいくらでもねじ曲げたまま生きていけるのが人間だから。第四学群を認めない僕以外のこの大学の学生たちにとつて、それは存在する。姉さんは生き続ける。そうでありうる。この大学に普通は通用しないのだから。学生たちが生み出した共同幻想、認識によって決定される不定形の存在。それが第四学群だと、僕は解釈した。僕が自ら、存在するか存在しないか、生きているか死んでいるかから『それ以外』を手放しただけだった。そうすることしかできないのが僕だから。

のろのろと転がっていた自分の自転車を拾い直し、家を目指す。数日前に執り行われた葬式で飾られたばかりの、七年前の姉さんの遺影がそこにある。僕はおそらく、そのことを三輪にも香坂にも、一生伝えないだろう。そうする限りいつか彼らも、姉さんに会えるかもしれない。第四学群へ行けるかもしれない。うらやましいとは思わない。

ただ、寂しいとは思った。